

アクティブ・ラーニング実施状況アンケート調査報告

第三期中期計画においてアクティブ・ラーニングを推進するに当たり、アクティブ・ラーニング実施の現状や課題等を把握し、今後の教育改革に資することを目的として、本学（学士課程教育）のアクティブ・ラーニング実施状況についてアンケート調査を行いました。

1 調査概要

(1) 対象科目（2017年度学士課程教育での開講科目）

全学共通科目 1,327 科目 <回答科目数：483 科目 回答率 36.4%>

専門科目 2,490 科目 <回答科目数：895 科目 回答率 35.9%>

(2) 実施時期

平成29年7月10日（月）～平成29年7月24日（月）

(3) 対象者数および回答者数

<対象者>2017年度学士課程教育での授業を担当する教員（常勤・非常勤）すべて。

<回答数>対象者：1034名、回答者：517名、回答率：50%

(4) 質問項目

<問1>あなたが平成29年度に担当する授業名（学士課程のみ）を記入し、各授業におけるアクティブ・ラーニング実施の有無、実施内容、実施による効果、実施していない場合はその理由について、全学共通科目・専門教育科目ごとに回答してください。（後期に開講する授業等、調査時点で開講していない授業については予定として回答してください。）※卒業論文、卒業研究は除く

「1. 全学共通科目」「2. 専門教育科目」において以下の①～⑥の問を設定。

①授業科目名

②授業の方法

（①の担当授業の方法について、以下の1～4の該当するものに○をしてください。併用して実施する場合は、当てはまるものすべてに○をしてください。）

③アクティブ・ラーニング実施の有無

（実施している場合は「はい」、実施していない場合は「いいえ」に○をしてください。）

④アクティブ・ラーニングの実施内容

（当該授業でアクティブ・ラーニングを実施している場合、下記A表の中から、当てはまるすべての項目の数字を記入してください。）

⑤アクティブ・ラーニングの実施により認められる効果

（当該授業でアクティブ・ラーニングを実施している場合、下記B表の中から、当てはまるすべての項目の数字を記入してください。）

⑥アクティブ・ラーニングを実施していない理由

（当該授業でアクティブ・ラーニングを実施していない場合、下記C表の中から、当てはまるすべての項目の数字を記入してください。）

<問2（自由意見）>あなたが担当する授業においてアクティブ・ラーニングを実施する上での工夫、アクティブ・ラーニング実施した結果、課題や困っている点などがあれば自由に回答してください。

<参考：本アンケート実施に当たってのアクティブ・ラーニングの定義>

アクティブ・ラーニングとは、「教員の一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称とされ、学修者が能動的に学修することによって、認知的、論理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。」と定義されています。（中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて 2012」）

また、教育学者の定義においては、「一方的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。」と記され、より広義な学習法として定義されています。（「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換」東信堂、溝上慎一、2014）

本アンケートを回答する上で定義するアクティブ・ラーニングについては、後者の定義を採用するものとし、以下の例に示すとおり、一方的な知識伝達型授業とは異なる、あらゆる能動的な学修方法を取り入れた授業全般について、アクティブ・ラーニングを導入しているものとします。

【アクティブ・ラーニングの例】

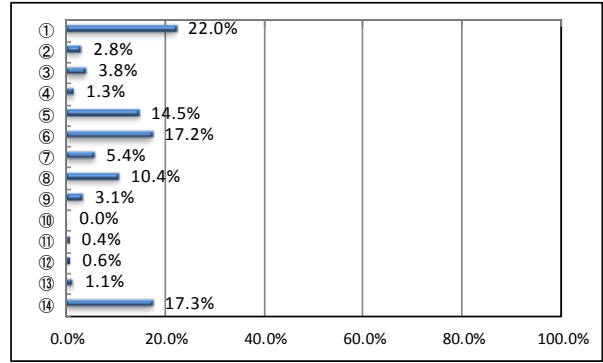
学生の調査・研究発表を中心とした授業（ゼミ形式の授業含む）、グループワーク（ペアワーク）、ディスカッション、プレゼンテーション、PBL（問題基盤型学習・課題解決型学習）、授業中の質問の投げかけとフィードバック、リアクションペーパー（ミニッツペーパー）等の活用、小テスト等の実施、反転授業、e-ラーニングの実施、学生が参加する実験・実習の実施、フィールドワークの実施、レポート等の課題の実施、演習の実施等

2 集計結果

所属

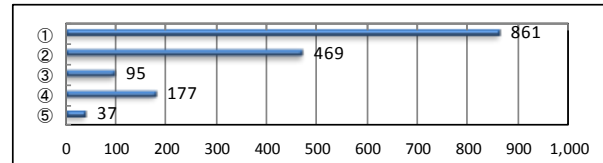
	回答数	回答率
① 人文・社会系	303	22.0%
② 法学系	39	2.8%
③ 経営学系	52	3.8%
④ 都市政策コース	18	1.3%
⑤ 理工学系	200	14.5%
⑥ 都市環境学部	237	17.2%
⑦ システムデザイン学部	75	5.4%
⑧ 健康福祉学部	144	10.4%
⑨ 大学教育センター	43	3.1%
⑩ 学生サポートセンター	0	0.0%
⑪ オープンユニバーシティ	6	0.4%
⑫ 国際センター	8	0.6%
⑬ 学術情報基盤センター	15	1.1%
⑭ 無効・無回答	238	17.3%
合計	1,378	100.0%

※回答率=所属別回答数/全回答数(1,378件)



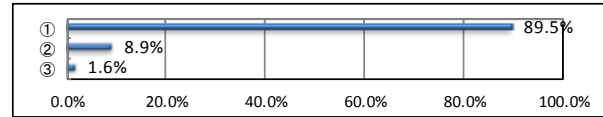
授業の方法(複数回答可)

	回答数
① 講義	861
② 演習	469
③ 実験	95
④ 実習・実技	177
⑤ 無効・無回答	37
合計	1,639



アクティブ・ラーニング実施の有無

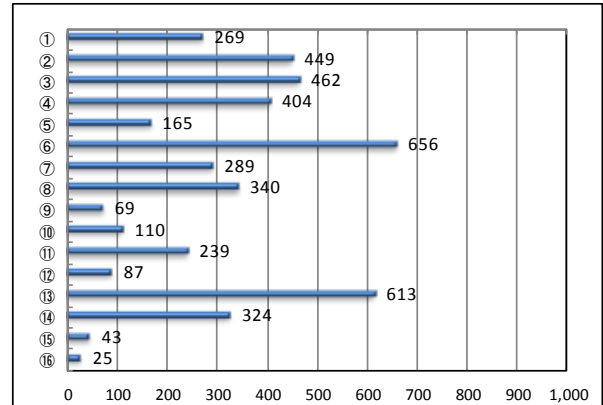
	回答数	回答率
① はい	1,233	89.5%
② いいえ	123	8.9%
③ 無効・無回答	22	1.6%
合計	1,378	100.0%



※アンケート回答には「いいえ」と回答がありながら④⑤の設問に回答しているものを実施有に10件含めた。

アクティブ・ラーニングの実施内容(複数回答可)

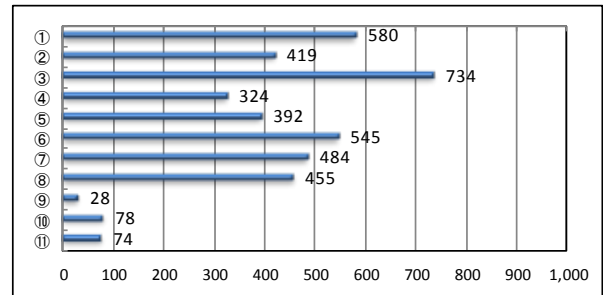
	回答数
① 学生の調査・研究発表を中心とした授業	269
② グループワーク(ペアワーク)	449
③ ディスカッション	462
④ プレゼンテーション	404
⑤ PBL(問題基盤型学習・課題解決型学習)	165
⑥ 授業中の質問の投げかけとフィードバック	656
⑦ リアクションペーパー等の活用	289
⑧ 小テスト等	340
⑨ 反転授業	69
⑩ e-ラーニング	110
⑪ 学生が参加する実験・実習	239
⑫ フィールドワーク	87
⑬ レポート等の課題	613
⑭ 演習	324
⑮ その他	43
⑯ 無効・無回答	25
合計	4,544



※アンケート回答にはアクティブ・ラーニング実施の有無で「いいえ」と回答しながら④の設問に回答しているものを9件を回答に含めた。

アクティブ・ラーニングの実施により認められる効果(複数回答可)

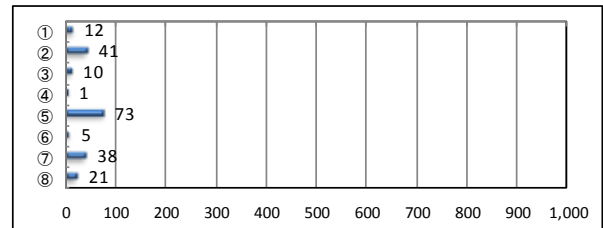
	回答数
① 学生が獲得する知識の質が向上した	580
② 学生が獲得する知識の量が向上した	419
③ 学生の主体的・能動的な学習姿勢が向上した	734
④ 学生の問題解決能力が向上した	324
⑤ 学生の総合的問題思考力・論理的思考力等が向上した	392
⑥ 授業が活性化した	545
⑦ 学生同士のコミュニケーションが活性化した	484
⑧ 授業時間外学習時間が増加した	455
⑨ その他	28
⑩ 不明	78
⑪ 無効・無回答	74
合計	4,113



※アンケート回答にはアクティブ・ラーニング実施の有無で「いいえ」と回答しながら⑤の設問に回答しているものを8件を回答に含めた。

アクティブ・ラーニングを実施していない理由(複数回答可)

	回答数
① 手法がわからないから	12
② 授業設計が難しくなるから	41
③ 教員の負担が増えるから	10
④ 評価方法が分からないから	1
⑤ アクティブ・ラーニングが馴染まないと思うから	73
⑥ 興味がないから	5
⑦ その他	38
⑧ 無効・無回答	21
合計	201



※アンケート回答ではアクティブ・ラーニング実施の有無で「はい」と回答しながら⑥の設問に回答しているものを5件の回答を含めた。

3 代表的な自由記述コメントと、それぞれに対するFD委員会の回答

1. 多人数授業でのアクティブ・ラーニング実施が難しい

- ・ 履修者が多いと、教員の負担が大きくなる。
- ・ 履修者が多いと、フィードバックや目配り等にも限界が生まれ、効果が限定的になる。

多人数授業におけるアクティブ・ラーニング実践には、少人数授業とは異なる工夫が必要なことは確かです。たとえば、中井（編）（2015）では、次のように述べられています。

『アクティブラーニングの技法の中には、少人数授業で実施している方法を多人数授業でも実施できるように工夫した技法が見られます。たとえば、あるテーマについて学生に議論をさせたいと考えたときに、少人数授業であればクラス全体で議論することができますが、多人数授業の場合はグループにわけて議論をさせた後に全体で議論をするなどの工夫が必要になります。同様に学生が書いてきたレポートに対してフィードバックを与えたいときに、多人数授業では学生同士でコメントさせる作業を取り入れたり、代表的なレポートに対して教員がフィードバックをあたえたりするなどの工夫が必要になります。』（P.8）

これは一例ですが、多人数授業に対応するための手法はさまざまなものが研究・実践されています。また本アンケートに回答いただいた内容を見ると、本学にも多人数授業へのアクティブ・ラーニング導入を試行錯誤されている授業が少なからずあるようです。FD委員会としては、今後のFDセミナーやアクティブ・ラーニング手法紹介セミナー、ハンドブック等による情報発信などを通して、そうしたノウハウの共有を進めていきたいと考えています。

2. 教員の作業量が多い

- ・ 従来型の一方的講義よりも、授業準備や課題へのフィードバック等に時間がかかる。

1. に対する回答と重なりますが、たとえば中井（編）（2015）では、次のように述べられています。

『学生が書いてきたレポートに対してフィードバックを与えたいときに、多人数授業では学生同士でコメントさせる作業を取り入れたり、代表的なレポートに対して教員がフィードバックをあたえたりするなどの工夫が必要になります。』（P.8）

ここにもあるように、学生同士でレポート等の採点やコメントをし合う活動（ピアレビュー）など、従来教員が行ってきた作業を学生の学習活動として授業に組み入れることで、教員の負担減と学習効果増の両方をねらうことも行われています。また、kibaco等のICTツールを活用することで、授業時間外学習の準備、管理、採点などを効率化できる可能性もあります。

多人数授業での実施と同様、教員負担の軽減という面からも、FDセミナーなどを通してこれらに対応する情報の共有を進めていきたいと考えています。

3. 授業時間が足りず、教えられる知識の量が減る

- ・ アクティブ・ラーニングを実施すると時間がかかり、教えることのできる知識や情報の量が減ってしまう。

中井（編）（2015）では、次のように述べられています。

『アクティブラーニングにおける学習内容の量に関しては、授業時間外の学習を含めて設計する必要があります。（中略）授業時間外の学習を有効に活用する事例は見られます。一例を挙げると、授業時間外に予習として知識の習得をさせ、教室内ですでに学習した知識をアクティブラーニングで活用させるといったものです。特に近年では、eラーニングなどを活用して授業時間外に知識を効果的に提供することが容易になっています。』（P.12）

ここで述べられているようなスタイルの授業は近年では「反転授業」と呼ばれています。単位の実質化の観点からも、授業外の学習を含めた授業設計として有用な手法のひとつです。11月30日のFDセミナーのテーマは「反転授業とeラーニング教材の活用」としており、事例を中心にこうした手法について紹介するものとなりますので、ぜひ参考にいただければと思います。

また、本学教育研究審議会が平成26年1月に策定した教育の基本方針「本学の教育改革」においては、『知識・理解だけではなく、考える力等の普遍的能力の育成を意識した授業を行う』ことをめざし、『知識量を少し削減しても、主体的に考える力を身に付ける』という方針が示されています。こうした点からも、各授業の学習目標をカリキュラムの観点から再検討し、「より多くの知識を教える」ことが望ましいのか、「本質的な知識を深く理解することをめざす」のかをあらためて考えることも場合によっては必要かもしれません。アクティブ・ラーニング的な学習活動をどの程度授業に組み入れるべきなのかは、そうした学習目標の内容に依存するものと考えられます。

4. 学生が積極的でない、学生が多様で実施が難しい

- ・ 学生が積極的に発言せず、双方向授業が成り立ちにくい。
- ・ ペアワーク・グループワークに積極的に参加しない学生がいる。
- ・ 学生の特性（やる気、理解力 etc.）によって場の状態が変化するため、同様の内容でのアクティブ・ラーニング実施が難しい。レベル調整、ファシリテーションなどに課題がある。
- ・ 授業時間外学習が多くて他の科目（やクラス）と比べて不公平だという学生の不満が多くでる。学生に講義時間外に講義時間の2倍の時間は学修するのが単位取得の条件である（大学設置基準21条）事を広く大学として全力で徹底して欲しい。

ベネッセ教育研究開発センターによる調査等においても、「演習形式よりも講義形式がよい」「楽に単位が取れる授業がよい」といった、アクティブ・ラーニングあるいは積極的学びに対するネガティブな姿勢を示す学生が比較的多いことが指摘されている¹ことから、これは多くの大学に共通した問題であると思われます。一方で、そうした学習活動の「必要性」については多くの学生が認めているという調査結果もあります²。つまり、必要だとは理解しているが、苦手・面倒といった理由からアクティブ・ラーニングに対して消極的な態度をとる、という学生が少なくないものと考えられます。

そのような志向性をもつ学生が一定程度いることは避けられず、これはアクティブ・ラーニングを授業に導入するうえで必然的に生じる課題であると思われます。これを大前提として、学生にアクティブ・ラーニングへの参加の意義をさらに理解させる、活動への苦手意識や不安などを取り除くといった授業運営上の工夫を重ねることが必要になると考えられます。アクティブ・ラーニング型授業を進めるうえでは、教員は「知識の提供者」であるだけでなく、学生の学習活動を促進するファシリテーターとしての役割が求められ、場に応じた柔軟な授業進行を行うスキルが必要になります。多人数授業への対応等と同様、セミナーや情報発信等によるノウハウの共有を積極的に進めていきたいと思えます。

また別の重要な観点として、アクティブ・ラーニングの推進は初等中等教育段階においてもますます求められ(2014年中教審への諮問など)、近年では「総合的な学習の時間」などでの実践が進んでいるという事実も挙げられます。ベネッセ教育総合研究所による調査報告によると、小中高校ではすでにアクティブ・ラーニング型の授業がかなりの程度で取り入れられており、またこうした形態の授業を好む小中高生は増加傾向にあるようです³。すなわち今後は、アクティブ・ラーニングに慣れた状態で大学へ入学してくる学生がより多くなることが想定されます。そうした学生の学習スタイルをふまえて、大学においても適切なアクティブ・ラーニング型授業を推進していくことが望ましいと考えられます。

学習量に関しては、最後のコメントに記述いただいたように、そもそも単位制度の趣旨から、授業時間外学習を考慮した授業設計はどの授業においても当然であるはずなので、その点はFD等を通して共通認識が持てるようにしていき、科目によって学習量が極端に異なるという状況を改善していきたいと考えています。

5. どうすれば効果を生むアクティブ・ラーニングが実施できるか

- ・ 一方向的な授業にならないようグループワーク等をすでに取り入れているが、「アクティブラーニング風」にとどまっている印象がある。
- ・ アクティブラーニングを試みているが、学生によってはうまくいかないこともある。
- ・ 効果的なアクティブラーニングを実施するための研修や文献情報などがほしい。

今年度より、隔月でFD委員会主催の「アクティブ・ラーニング手法紹介セミナー」を開催しています⁴。また例年秋(今年は11月30日)にはFDセミナーを開催しています。このような場にぜひご参加いただき、スキルや知識の獲得、教員間の交流などにご活用いただければと思います。

手法に関しては、FD委員会2015年度制作の「授業改善ハンドブック vol.1」に代表的なものを簡単に紹介しています⁵。また、学内の実践事例も多数紹介しています。

近年ではアクティブ・ラーニングの理念や具体的手法を詳しく紹介した書籍が数多く出版されており、授業へのアクティブ・ラーニング導入への参考になります。以下に一部を紹介します。

中井俊樹(編)『シリーズ大学の教授法3 アクティブラーニング』(玉川大学出版部、2015)

溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』(東信堂、2016)

松下佳代『ディープ・アクティブラーニング』(勁草書房、2015)

スーザン A. アンブローズほか(著)、栗田佳代子(訳)『大学における「学びの場」づくり』(玉川大学出版部、2014)

前ページと重なる話になりますが、アクティブ・ラーニングの実施は、特定の「手法」を導入しさえすればよいというものではなく、学生の特性や場の状態をふまえた「ファシリテーション」のスキルが必要になります。このスキルの獲得は、文献やセミナー等により知識を得るだけでなく、実際の授業実践における試行錯誤とそのふりかえり、さらにそれらの教員間での共有などを通して体得することが不可欠であると考えられます。そうした意味からも、今後は教員間の交流を含むFDの場を作っていけたらと考えています。

6. 効果の測りかた、評価のしかた

- ・ アクティブ・ラーニングによって知識・能力などがどのように身についたかを測定・評価するのが難しい。

¹ ベネッセ教育研究開発センター、第2回 大学生の学習・生活実態調査報告書 ダイジェスト版(2012年)、
<http://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=3160>

² 東京大学大学経営・政策研究センター、全国大学生調査 第1次報告書(2008年)、
<http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/cat79/post-11.html>

³ ベネッセ教育総合研究所、第5回学習基本調査報告書(2015年)、
<http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=4862>

⁴ これまでのセミナーの動画も公開しています。詳しくは教務課教務企画係(kyomu-kikaku@jmj.tmu.ac.jp)にお問い合わせください。

⁵ FD委員会 Web サイトでも PDF ファイルで公開しています。<http://www.comp.tmu.ac.jp/FD/>

アクティブ・ラーニングの評価についてもさまざまなものが研究・提案されています。とくに能力の測定・評価は、従来の試験やテストでは困難であることが多く、ルーブリックなどを用いたパフォーマンス評価・ポートフォリオ評価などが提唱されています。今年度配付した FD 委員会制作の「授業改善ハンドブック vol.2」において、アクティブ・ラーニングの評価手法、評価の設計、ルーブリック作成などについて簡単にまとめ、学内事例の紹介も行っていきます⁶ので、ご参照ください。

そのほか、アクティブ・ラーニングの評価に関する関連文献としてはたとえば以下のようなものがあります。

松下佳代、石井英真（編）『アクティブラーニングの評価』（東信堂、2016）

ダイアン・ハート（著）、田中耕治（監訳）『パフォーマンス評価入門 「真正の評価」論からの提案』（ミネルヴァ書房、2012）

リンダ・サスキー（著）、齋藤聖子（訳）『学生の学びを測る アセスメント・ガイドブック』（玉川大学出版部、2015）

ダネル・スティーブンス、アントニア・レビ（著）、佐藤浩章（監訳）『大学教員のためのルーブリック評価入門』（玉川大学出版部、2014）

7. アクティブ・ラーニングについての一般論

- このような取り組みは、「アクティブラーニング」という名称を用いなくても、以前から行っているものである。今回あらためてアクティブラーニングとして定義される方法と、過去に広くおこなわれてきた方法は、何か相違があると考えられているのか。アクティブラーニングを主唱する側からの見解というものがわかれば知りたい。
- 「アクティブ・ラーニング」を今回提示されたようなものだとすると、おそらく語学はすべて「アクティブ・ラーニング」を導入していることにはなっていないかと思うのですが、実際にやっている学生がアクティブな意識を持っているかどうかは別物かと考えています。
- 他大学の取り組みの 2 番煎じではダメ 首都大オリジナルのアクティブ・ラーニングとは？

溝上によると、「アクティブ・ラーニング」という語は、米国の 1980 年代高等教育のなかで盛んに用いられるようになった用語であるようです。大学の大量化や学生の多様化などを背景に、「教員から何を教えるか」から「学生が何を学ぶか」へ、という「教授パラダイムから学習パラダイムへの転換」が重要視されたことに関連し、これを推進するものとして、従来から存在した PBL (Problem-based learning) や協同学習 (cooperative learning) などをも含む包括的な概念として active learning が提唱されたという経緯があるようです⁷。つまり、ご指摘の通り、現在「アクティブ・ラーニング」としてまとめられているさまざまな取り組みは、従来から行われていた方法であることも多いと思われます。

「実際に学生がアクティブな意識を持っているか」は非常に重要な視点だと思います。「5. どうすれば効果を生むアクティブ・ラーニングが実施できるか」のコメントにもあったように、「アクティブ・ラーニング風の活動」は実施していても、実際に学生がアクティブであるかどうかは心もとない、ということはよくあると思われます。これは「6. 効果の測りかた、評価のしかた」にも関連するものです。この観点も今後 FD のテーマとして取り扱っていったらと思います。

「首都大オリジナルのアクティブ・ラーニング」の構築に向けて、FD 委員会を中心として、本学教職員がアクティブに議論する場を今後さらに作っていったらと考えています。

8. アクティブ・ラーニングに向かない授業もある

- 知識を（いちから）教える座学が必要な授業には、アクティブ・ラーニングは向かない。
- 「能動的」のレベルをどこに設定すればよいのか、よくわからない。クラス全体のうち、1割でもアクティブになればよいのか、それとも全てをアクティブにする必要があるのか？

「座学」の重要性とアクティブ・ラーニングの関係については、よく議論されるトピックだと思います。たとえば中井（編）（2015）では、次のように述べられています。

『アクティブラーニングは、講義法と異なる教授・学習法です。したがって、アクティブラーニングとその意義を理解する上でも、講義法の特徴を理解することが重要です。

講義法は、ある学習内容について、教員が説明することで学習者に学習させる方法です。多くの聴衆に多くの情報を一度に伝達できるという特徴があります。一方、講義法は参加者が受け身になりやすいという弱みももっています。受け身の学習が続けば、私語や睡眠を誘発することもあります。

また、講義を聞くだけでは身につけることができない領域の能力があります。かけ算の方法を身につけるには、説明されるだけでは不十分で、何度も練習問題を解く必要があります。同様に、自転車の乗り方を説明されただけでは、自転車に乗れるようにならないでしょう。つまり、講義法では、知識の活用や技能の習得などの学習目標に対しては十分な効果が期待できないのです。

しかし、講義法がなくならないことも多くの識者によって指摘されています。講義法は重要な教授法の一つであ

⁶ FD 委員会 Web サイトでも PDF ファイルで公開しています。 <http://www.comp.tmu.ac.jp/FD/>

⁷ 溝上慎一、アクティブラーニング論の背景、 [http://smizok.net/education/subpages/a00001\(haikei\).html](http://smizok.net/education/subpages/a00001(haikei).html)

り知識の伝達は依然として重要です。アクティブラーニングは、講義法の課題を補完する方法として活用されることが期待されているのです。』(P.6～7)

ここにもあるように、「講義法」の重要性は当然否定されず、また「すべての授業のすべての時間をアクティブ・ラーニングにする」ことが望まれるわけでもありません。科目の学習目標に合わせて、従来型の「講義」と、「書く・話す・発表する」などのアクティブ・ラーニング型の学習活動の適切なバランスを探りながら授業設計をすることが望ましく、科目の特性やねらい、カリキュラム上の位置づけなどによって、そのバランスは当然に異なると考えられます。

一般に、アクティブ・ラーニングの重要性が主張された背景には、大衆化した学生の多様な学習観や資質に対応するという文脈に加え、「汎用的技能」「態度・志向性」「統合的な学習経験と創造的思考力」といった資質・能力の育成が求められるという文脈が一方にあります。本学のディプロマポリシーにもこうした資質・能力の育成が謳われており、これと各授業との関係を整理したうえで、適切なアクティブ・ラーニングのバランスを取る必要があると考えられます。

9. 教員への支援体制、教員間の情報共有

- ・ 他の教員との実践事例の共有の場がほしい。
- ・ 反転授業等に用いる e ラーニングの制作の支援がほしい。

現在隔月で実施している「アクティブ・ラーニング手法紹介セミナー」では、手法の紹介はもちろん、ワークショップ形式で、参加されている教員同士での意見交換・実践事例共有なども積極的に行っています。このセミナーシリーズに限らず、今後は学内教員との実践事例共有の場をさまざまな形で設けていきたいと考えています。また、FD委員会制作の「授業改善ハンドブック vol.1、2」には、学内教員による多数の事例が紹介されていますので、こちらもご参照ください。

また、本アンケートの回答のうち、本学教員がすでに行っているアクティブ・ラーニングの工夫や成果に関するものを以下にまとめましたので、ぜひご覧ください。

e ラーニング制作支援などの教員支援についても、今後の検討課題とさせていただきます。

《すでに行っている工夫や成果》

■リアクションペーパーとそのフィードバック

- ・ リアクションペーパーに対するフィードバックを授業の冒頭で必ずとり入れるようにしている。質問が深まっているように感じる。
- ・ リアクションペーパーに書かれた質問をプリントにしてフィードバックするように努めています。
- ・ リアクションペーパーに書かれていることは基本全て取り上げる。(ただのコメントや受けを狙ったネタでも) そうすると回答率が上がります。
- ・ リアクションペーパーについては、必ず目を通し、次回に紹介しつつ、必要な解説をしている。個別の事情に配慮しつつ行うようにしている。
- ・ 映画の感想ペーパーを印刷配付。コメントをつけるので、ときに双方向となる。
- ・ アクティブ・ラーニングというほどではないが、講義中に扱った問題群のうち、とりわけ正解が何か難しい問題について、2 回ほど「アンケート」と称して自由に意見を書いてもらい、その内容を当方が打ち込んでプリントアウト・配布し、適宜講評した。それによって、講義出席者の問題意識もそれなりに深まったと考えている。
- ・ 教養科目は 150～500 名が集まる科目であったことから、理念として重要と思うアクティブ・ラーニングと、実際に実行できる内容にどうしてもくい違いが見られた。リアクションペーパーで出た質問に対する答えをする時間を授業内に設定すると、ペーパーの充実度が格段に上がり、満足度も高まった。しかしその結果、質問数増加や質向上により多くの時間を割くこととなり、シラバスとのくい違いが生じてくる。そのくい違いに対して不満をのべる学生もいる。
- ・ 各授業のはじめに前回の内容に関する小テストを実施しています。またその用紙のうらにはその回の授業内容についての質問やコメントを書いてもらいます。質問やコメントにはできるだけ回答するようにしています。質問コメントへの回答によって学生の理解が深まっているように感じます。

■レポートとそのフィードバック

- ・ 講義のあと、課題レポートを毎回提出させる。そのレポートの 3、4 例を次回の講義の冒頭に紹介（プリントする）して全員で問題点、論点を把握する。
- ・ 月決め課題と総復習レポートの課題の実施、不明な点、再復習等、学生側からの要望を取り込んだ課題レポートを最後の授業で実施
- ・ 前期においては、本文のまとめ方を学習してもらうことに専念した。後期では学生自身にこれを行ってもらう予定。
- ・ 演習問題を提出させ、添削して 5 段階に評価して返却している。そうすると学生たちの授業に取り組もうとするモチベーションが上がるようだ。
- ・ レポート課題の最後に「質問があれば書いてください」と一言そえただけで、質問をする学生が増えた。その結果、学生がどこでつまっているかが、以前よりより詳しくわかった。レポート課題でも結果に対してコメントを求め、結果の意義、意味をかかせるようにしている。

- ・ 履習人数が多いため採点、返却に時間がかかる。なお演習は毎時間最後の 15～30 分とって行ったので合計 12 回提出した。返却は毎回行なえばよいが、時間がかかるため 7/24 にまとめて返却する。その代わりに、適切な解答をした提出物を印刷して配布、解説している。

■反転学習・授業時間外課題

- ・ 反転学習では講義内容に関する英文資料を渡して、和訳させている。予習と科学英語の学習を兼ねているので効果的である。
- ・ 実習の 9 (反転学習) はビデオ教材の事前視聴 (自主制作)
- ・ 毎回のレポート提出と、それを学生と見ながら、誤りの指摘と議論を行なった。
- ・ 基本的にやって来たことをほめる。そのうえで改善すべき点を指摘する。飛躍的に発展する者はほとんどいないが、ステップバイステップで成長するタイプの子にはとても良いアプローチだと実感している。

■ペアワーク・グループワーク

- ・ ペアワーク (グループワーク) を好む学生、積極的に参加できる学生も多い。
- ・ 講義中にペアワークを入れ、その結果を基に講義をし、レポートを課すようにしている。
- ・ グループワーク (ペアワーク) などをしてもらおうと理解度を高め、授業への積極的参加度も高まるが、特に英語での授業では時間をとられて、知識や情報を与えられる量がかなり減ってしまう。もっと、予習をベースにした授業にしないと無理がある。
- ・ 学生は、多くの講義中心の授業について、批判的である。課題の質を高めることは、最大の課題である。異なる専攻の学生 4 人でグループを組ませ、途中で入れ換えている (学期の)
- ・ グルーピングにおいては、学習スタイルのインベントリを用いて、多様な学習スタイルの学生でグループを作るよう促し、学生自身にグループを決めてもらった。グループワークの期間、授業中には全体へのヒントやフィードバックを主に行い、グループワーク自体は主に授業外に行うようにした。グループワークは、成果だけでなくプロセスが重要であることをメッセージとして伝え、プロセスをふりかえるワークシートや、そのグループ内での共有などの活動を行った。
- ・ グループや個人のプレゼンテーションは学生同士の相互評価を行い、それらを匿名化したうえで一覧表として可視化し、全員で共有した。こうすることで、他者の感じ方と自分自身の感じ方の差を実感できるよいフィードバックになったという手応えがあった。
- ・ グループワークで行うプロジェクトのプロセスを 1 つ 1 つ指導した。
- ・ グループ内で解決が難しい場合は、他のグループに意見を求め、学生同士での解決を促す。
- ・ I am a very strong believer of active learning-to get students actively participating is always my primary goal. First through individual research/preparation and should through group work. I feel my students have progressed throughout the term and improved on expression their opinions and ideas.

■ディスカッション

- ・ 本学の学生の知識量、考え方の組方など引き出せばかなり高いレベルにある。留学生がいる場合には質問を彼等に投げかけ、学生間の討論に持っていくことを心がけている。かなり盛り上がる。
- ・ ディスカッション実施のタイミング ブレインストーミング (以下 B-S) を実施。テーマを事前 (GW 前) に伝えておき、テーマに関連したミニレポートを課すことで、B-S の準備時間を授業外に設けた (レポートは Kibaco で提出)。GW 明けの B-S ではレポート作成時の考察をグループ内で発表する学生が見受けられた。
- ・ 課題に対して、資料等の読み取りを各自した後、グループ討議をし、全体に発表している。1 つの意見にしぼるといふより、多様な意見を思考し、ききあうことにより深まっていくことを目的にしている。

■双方向授業

- ・ 問題を投げかけて、Kibaco のクリッカーで答えさせて意見分布を取ると盛り上がった。
- ・ 授業中に指名して質問に答えてもらうようにしている。学生の集中力を維持しつつ、自分で考える力を養うために有効な手段だと思っているが、名指しされて答えなければならない状況に心理的負担を感じる学生が一定数いるように見受けられる。彼らの心理的負担を減らすような方法があれば、知りたい
- ・ 学生の発言に対して、担当講義の専門家としての深いフィードバックができるかを、常に意識している。
- ・ 各々が設定する目標を明確化し、尊重する。発言を捉し、趣旨は否定せず、論理的に主張をプレゼンテーションする方法についてコメントをするように心掛けている。持ってきた成果に対し、次の展開の可能性と課題を伝えている。
- ・ 教員から一方的に話すのは、テーマの提示や背景の説明の最初の 5 分程度で、その後はすべて学生からの質問に基づく対話的な授業を進めている。それにより、学生の主体的・能動的な学習が達成できている。
- ・ 日本人の学生に受け入れられる範囲で、CEFR や欧米的な参加型の授業をとり入れて行きたいと思っています。

■演習・小テスト

- ・ 講義では可能な限り、問題を解く時間を設けています。その時間は、まわりの人達と相談しながらやってもよいということを言っています。
- ・ 演習を解いている学生を見て周り、アドバイスをを行う。何もせず、ただ解答を待つ学生がいる。

- 朗読練習に重きを置き、ほぼ毎回「読みのテスト」。20人のクラスで20人参加。難点は時間がかかること。

■PBL・フィールドワーク等

- 大学院の科目において、PBL（グループにて活動）を担当している。これはうまく出来ている。
- PBL型を実践している。相互の対話方式から自由な発想が引き出せていると実感している。しかし、時間が少なく（現状では1コマ/週で上期のみ）授業以外での学習を指導しているが、満足ゆくレベルに仕上がっていない。アクティブ・ラーニングには考え、話し合う時間が必要であり、私のような外部の客員教授には与えられる権限もない為、成果につながっていきにくいと考える。
- 学外フィールドとして、都内にある専門性の高いライブラリーに行き、そこの館長を始めとして、特殊講義してもらい、問題解決のための文献を多く発見したこと（味の素ライブラリー）。学生に好評された。
- フィールドワークをする場合、前後に授業があるとそのコマの中で終了することが難しく、これまでは苦労していましたが、今年度から5月に補講日ができたので、その時間をうまく活用することができました。同様の学年暦が続くのであれば、有効に活用していきたいと思っています。
- カリキュラムに掲載されない FBL (Field Based Learning) として、一昨年より、当方が担当して学部2年生約50名を建設現場に連れて行き、現場調査および見学前後にレポートも課しています。土木工学を専攻する彼らにとっては、ナマの現場に触れることが大変うれしいようで、座学でやっていることの意味を理解することに役立つ、とか、現場の方々と意見交換できキャリアパスについても理解できるなどすこぶる評判がいいです。こうした形態に対してもっとバックアップして頂ければと思います。

■授業進行上の工夫

- 文法説明の前には「次にこれを使った練習問題をやります」と言い、発音練習の前には「次にペアで発音をチェックします」と予告して、頻繁に学生を刺激するようにしています。
- ディスカッションがいつの間にか無駄話になってしまうことがあるので、様子を見て切り上げる。
- 基本的に、モニターを通した講義になるので、学生との接点は少ない。それを考慮して、演習の時間帯は、なるべく机間巡視を行うようにしている。学生と直に話す時間を設けることで、学生の主体性や内発的動機づけを刺激しているが、そのプロセスを経て、能力形成に多少は貢献しているのではないかと思う。
- リアクションペーパーや課題提出は、kibacoのアンケート/テスト機能を用いた。

■学生の多様さへの対応

- A表の15について、学生の予習と復習を、演習などで“実践効果”を見える化にしてみました。演習が早くできた学生はどんどん先に進んで、予習の効果をクラス全般に“見える化”たとえば、他校では、飛び級がありますが、授業の中でも、先に演習などの課題を完成できたら、先に進むような仕組みを取りました。そしたら、学生が自ら予習して来るように。また限られたTAと教員が遅い学生がサポートできます。ボトムアップで優秀な学生が更に学習のスピードアップにつながります。
- 語学力の劣る学生が積極的に活動に参加できるよう配慮している。
- 多人数で学生同士が互いによく知らない授業の場合、吃音など障がいのある学生がいるので、グループワークやディスカッションをするときには気をつけています。

■能動的学習へ導くための工夫、アクティブ・ラーニングを行ううえでの心がけ

- 自由に考える時間を与えること、適当なタイミングで補助してあげること。
- 必ず参加することで多少なりとも力がつくしやる気ができるように思う。
- 学習の素材を提供する際、学生さんの主体性を発揮できる範囲を限定しないようにその都度工夫しています。
- 学習指導案づくりでは、一人一人に他者とは異なる課題を設定し、各自が自ら調べ、指導案を完成させるよう工夫している。また、模擬授業は全員が行い、自ら設計した授業を体験する機会を持たせている。
- 知識やスキルを知ること、理解すること、それを実践の場で活用できるようになることの間ギャップを埋めるために、「教授・伝達」と「課題の実践」のバランスをどのように取るのが良いか、常に模索しています。
- 学生自身による課題の抽出、現状分析、解決策の検討・提案を引き出すように工夫している。教員が最初から解答を示すのではなく、そこに辿り着くまでの手順・思考方法を示すことにより学生自身が考えながら学習を進めていけるように仕向けているつもりである。
- 学生さん同士で話し合わせたり、考えさせたり、発表（表現）させたりする機会をできるだけ多く取り入れるように意識しています。その結果、どの学生さんも主体的、意欲的な学習姿勢が向上したと感じています。しかし、アクティブラーニングによって学生さんの知識や思考力などがどれだけ向上したのかを、どのように測定・評価をすればよいのかについて、難しさを感じています。
- グループワークや個人ワークに取りかかるうえでの具体的な方法や手法はほとんど示さず、まずは学生が自分自身の力で取り組み、その成果のアウトプットに対する学生同士の相互評価や教員からのフィードバックを丁寧に行うことによって、成果に対する自己認識を豊かにすることをねらった。また、グループワークは全く同じ素材と同じテーマを用いて各グループがそれぞれ活動を行ったが、具体的方法はグループごとに全体的に考えることとしたため、その成果はグループでかなり多様なものとなり、プレゼンでは多様性に対する驚きや気づきが学生に生まれているようであった。

- 当学科では、ほぼすべての教員が、多くの科目でアクティブラーニングを取り入れている。学生にとっては、与えられた課題をこなすための時間外学修が多くなり、特にグループで集まるためのスケジュール調整に苦労している様子である。能動的な学修の本質とは、学生自ら自由に興味や課題を見つけて取り組むことだとすると、現状は与えられた課題が多すぎるかもしれない。
- STUDENT-CENTERED TASKS, PAIR-AND GROUPWORK, 'REAL LIFE' TOPICS, NO TEXTBOOK, ETC.
- ただアクティブ・ラーニングの手法を取り入れればよいというだけでなく、目標やねらいにてらしてそうする必要はあるかどうか検討するように努めています。
- 一方通行の授業ではなく、アクティブなやりとりによる活性化が重要と感じる。
- 学生が興味を示し、印象に残るような課題を毎回出すよう心掛けています。
- メリハリを授業にも課題量にもつける。課題内容を明示、締め切りも明示するよう心がける。
- 個人的には短期的な効果よりも長期的、(卒業後、仕事や人生で役立つ等) 効果を大事にした
- 学生と e-mail でやりとりする時に、できるだけフランス語を使うようにして、フランス語に慣れてもらうように工夫すると共に、地域の美術館についてのレポート(仏語)や発表(同)などをしてもらい、文化そのものへの造詣を深めてもらうように努めている。

■具体的な授業の全体像

- この授業は基本的には講義科目だが、実践力を養うため、その日の講義に対応した演習時間を 20 分～30 分とっている。やり方は、まず演習問題の概略を説明した後、15 分～20 分演習。この段階では、まず自分で解く努力をした後、不明点や疑問点について、学生同志で議論したり、教え合ったりしてもよい。その後、黒板に正解を示すので、それに従って自分で○×をつける。その解答用紙は授業の後に提出する。これは(○×の数に関係なく)授業の平常点として成績評価に含める。当日の時間が不足した場合は、一部を宿題に回し、次週に正解を示す。
- 《授業科目名》は各回の内容を理解しないと先に進まないため、小テストやレポートで復習させている。知識の質の向上というよりも、授業の効果をあげるために必要。
- 《授業科目名》では、5 名程度の班ごとに、学生が実験のテーマ、方法を話し合っ決めて、実験を行い、レポートを書き、さらに優秀者のレポート発表・質疑というプロセスをとっている。
- 《授業科目名》では、学生各自が建物モデルや各部の仕様および計算テーマ・条件を決め、計算し、レポートを書くようにしている。
- 《授業科目名》、《授業科目名》においては、あまり積極的なアクティブ・ラーニングを実施していないが、講義資料の電子ファイルの配布をしており、予習に役立ててもらっている。
- 物理体系の一つとしての《授業科目名》のエッセンスを理解してほしいと思い授業しているが、省けない重要な項目が多く、通常授業だけで、目一杯の時間となっている。そのため、目的に足る十分なアクティブラーニングは実施できない状況にある。それでも、理解の確認は重要であるので、授業の最後に、復習のための小テストを行ない、次週に、ポイントの解説を行っている。
- 《授業科目名》では、“自由実験”という、学生自身が提案した研究実験を教員監修のもと行っており、特に学生の主体性や学習意欲向上につながっている。両実験とも、単にテキストに書かれた通りに実験を進めて、テキスト通りの結果を得るのではなく、結果を伏せ、予想した結果との違いを考えさせるようにしている。問題解決能力の向上につながっていると思う。
- 《授業科目名》では、地域で生活する子どもと母親に大学に来て頂き、触れあったり、子育て体験を話してもらう工夫をしています。学生 40 名に対して、子どもと母親の親子 13 組、程度。
- 《授業科目名》では課題を出してグループでディスカッションしたあとロールプレイさせることによって問題解決能力の向上を図っている。
- 実際に情報倫理教育の一環としてブレインストーミングをグループで実施させた時、少しでも班内での話題になればと思い、7、8 人*7 班に分けるにあたって、「1～7 の数字を好きな順番に並び替える」という問題を出して、主成分分析によるスコアによって班分けし、各班の傾向(中盤の数字が大きめ等)を示したところ、やや盛り上がりを感じられた気がします。一方、私自身の研究からも、熟慮型の学生への配慮も重要であるという視点から、そのような意見があることを講義内で紹介した上で、アクティブラーニング実施の是非を問う課題を出したところ、約 2/3 の学生(50 名中)が、この取り組みについて無批判に賛同しており、比較的、中高で実際に経験している学生は、こうした取り組みの中に入り込んでしまっている学生も多いのだと感じました(立場によっては、こうした傾向自体が、熟慮型の学生への配慮の重要性を示している側面もあると感じております)。また、グループ学習的な意味ではなく、主体的な学びにつなげるためのリアクションペーパー、実習・課題・小テストなどの実施、私からのフィードバックについては、こちらから「基本的な前提についてはできるだけ分かりやすく」「実際の PC 操作や課題・小テストについては手取り足取りは教えない」という立場を事前に示した上で、少し負荷を高めて実施しました。当然一定数の不満は出ましたが、課題・小テストの結果からも多くの学生は技術のある程度習得していると判断できましたし、そうした負荷に応えることで理解が深まったと自己評価している学生も多く居ました。課題・テスト等のフィードバックについては、個々人にはさすがにできませんでしたが、前回課題・テストではこういう間違いが多かったという振り返りや、得点分布の公開をすることで、各自の間違いに気付けたという学生が多く、「負荷をかけて失敗させ、そこにヒントを提示する」というプロセスに一定の効果を感じたところです。その際にこちら側の作業で便利であったこととしては、google フォームを用いて課題・テストを実施することで即時にスプレッドシートに吐き出し、excel 上で正答とのマッチを数式で自動処理する等、教員側の事前の仕込み

で、よりタイムリーに結果を学生に共有できたことで、学生の反応も大きく得られたような気がしています（特に《授業科目名》の性質上、excel を使えることでここまでできるんだ、とモチベーションが高まった学生もいるようです）。こうした取組みについては、海外の大学に比べて、比較的勉強量が少ない（自分自身の時間を大切にすると考えられる日本の大学生のライフスタイルや、教員の負担が増えることを考えると、一定以上増やすことには課題があると考えますが、学部の中で重視している科目については、有意義なアプローチであると感じました。

10. 首都大の教育環境

- ・ 固定の机や ICT 環境など、アクティブ・ラーニングを行うための環境が整っていない。

コメントいただいた通りで、柔軟なグループワークや ICT の活用を行ううえで、残念ながら本学の環境はまだまだ十分とはいえません。よりアクティブ・ラーニングの実施に適した環境を整えば、学習効果はさらに高まり、教員の負担も軽減されることと思われます。

今回の本アンケートの回答をみると、現在の環境下において、さまざまな教員がアクティブ・ラーニングのための工夫を凝らしていらっしゃるようですが伺えます。このような、現在の環境下で実行できる事例やノウハウの共有を進めるとともに、これと並行して環境の整備を進めていくことを目指したいと考えます。

《参考文献》

中井俊樹（編）『シリーズ大学の教授法3 アクティブラーニング』（玉川大学出版部、2015）

溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』（東信堂、2016）

《関連資料》

アクティブ・ラーニングの情報については、首都大学東京 FD ウェブサイトもぜひご覧ください。

首都大学東京 FD ウェブサイト <http://www.comp.tmu.ac.jp/FD/>

とくに、以下には過去の FD セミナーやハンドブック等、さまざまな情報を公開しています。本学の教育改革やアクティブ・ラーニングにまつわる講演、授業実践事例、手法紹介など、参考にさせていただければと思います。

クロスロード（年間報告書） <http://www.comp.tmu.ac.jp/FD/fdreport/crossroad.html>

授業改善ハンドブック、事例集等 <http://www.comp.tmu.ac.jp/FD/effort/case.html>

（参考）アクティブ・ラーニングの定義

■中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（2012年）における定義

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

■溝上による定義（溝上 2014）

一方向的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。

4 現状と今後の課題

F D委員会委員
大学教育センター准教授
近藤 伸彦

【アンケート集計結果からみえる現状】

本アンケートは、本学におけるアクティブ・ラーニング（以下 AL と表記）の現状を探るために、今回初めて行われたものです。ここでは、その回答結果をもとに、本学における現状と今後の課題についてまとめたいと思います。回答率や設問の構造を鑑みると結果の解釈には十分な注意をはらう必要がありますが、まずは自由記述以外の設問が単純集計された「2 集計結果」をそのままみてみます。

今回の回答者集団に関しては、AL と呼べる何らかの活動はおよそ 90%の授業で行われており、実施内容としては「授業中の質問の投げかけとフィードバック」「レポート等の課題」を取り入れている授業が 45%前後と比較的多く、次いで「グループワーク（ペアワーク）」「ディスカッション」「プレゼンテーション」などの活動を行う授業が 30%前後あるようです。さらに、AL の効果としては、「主体的・能動的な学習姿勢が向上した」と感じられた授業が半数程度あり、「知識の質が向上した」「授業が活性化した」「学生同士のコミュニケーションが活性化した」授業が 35～40%程度、「授業時間外学修時間が増加した」授業も 33%程度あったようです。

実施内容は分野の特性等によって異なる可能性が高いので一概にいえない面もありますが、大雑把に言えば、「従来より用いられてきた手法」がやはり高い割合を示しているように思われます。逆に「反転授業」「e ラーニング」などを取り入れている授業は少ないようですが、これらは知識伝達を主目的とする授業においてもその有用性が近年注目されている手法であり、今後の導入可能性は大きいものと思われます。

【すでに行われている本学のアクティブ・ラーニング】

本アンケートの自由記述には、AL 実施上の工夫やその結果についても回答いただいています。この回答をみると、すでに多くの教員が AL を試み、さまざまな工夫を凝らしているように見えます。

たとえば、リアクションペーパーの活用、レポートとフィードバック、反転学習の実施、ペアワークやグループワーク・ディスカッションの実施、双方向授業の工夫、PBL やフィールドワークの導入など、AL の各手法を取り入れた例が多数回答されています。また、単に「この手法を取り入れている」というだけでなく、「効果を生むためにはどのような工夫を加えればよいのか」「レベルや意欲に差のある多様な学生にどのように対応すればよいのか」「能動的な学習へ導くためにどのような心構えが必要なのか」といった具体的な（悩みをも含む）記述も多く見られました。

ここから感じられるのは、「首都大には、個々の授業においてすでに多くのノウハウが蓄積されているのではないか」ということです。ここで重要なのは、「首都大における」ノウハウである、ということです。AL は、「グループワーク」「ディスカッション」のような「手法のカテゴリ」に関心が向きがちですが、どのような手法も、場によって効果的な運営のしかたは変わるはずで、「首都大の」学生にとって効果的な AL を行うには、首都大の学生像や文脈をふまえた授業運営が必要で、これはすなわち、首都大には「首都大の AL」が必要だということだと思います。そのためにも、こうした「首都大ですでに蓄積されたノウハウ」を、より多くの教員間で共有し、ブラッシュアップしていくことが求められるのだと思います。本アンケートの回答そのものもその一助になると思われますし、今後はそのような「共有の場」としての FD 活動を活発化していくことが重要だと考えています。

【アクティブ・ラーニングに対する共通認識】

自由記述では、AL 導入についての課題や困っている点などについても回答いただいております。「3 代表的な自由記述コメントと、それぞれに対する F D 委員会の回答」には、代表的な回答と、それに対する FD 委員会としての回答をまとめました。AL そのものに対する意見等も含め、多様なコメントが寄せられています。実際に本学教員が感じている AL への思いがよくわかるものになっており、これがまさに本学の「現状」であると思います。分量が多いですが、ぜひご一読ください。

今回のアンケートでは、「AL を実施しているか、実施内容は何か、そしてその効果は？」という問いに対して回答がしにくいと感じられた先生方もいらっしゃったことと思います。これは、AL という概念の捉えにくさや、そのカバーする範囲の広さ、単一の授業における「効果」の測定の困難さなど、AL そのものもつある種の曖昧さが生むものでもあると思います。ここでまとめた自由記述の回答にも、それが表れていると感じています。

大切なのは、「AL をすること」が目的ではなく、「学生がよりよく学ぶこと」が目的であるということです。これを大前提として、あらためて自身あるいは教育課程の現在の授業のありようを再点検し、「この部分は AL 的な方法が効果的だろう」という部分について、適切な方法を導入することが重要なのだと思います。そのためにも、まず「AL とは何か」「AL が効果を生むのはどのようなときか」という根本的な点についての共通認識をもったうえで、「こうした学習目標を達成するにはどのような方法をとればよいか」「このような学生にはどう振る舞えばよいか」といった具体的なノウハウを多くの教員間で共有することが効果を生むと期待できます。

先に述べたことと重複するようですが、「首都大の AL」について教員間で対話する場を今後増やしていくことが重要だと感じています。「首都大の教育はどうあるべきか」という大きな話から、「目の前の学生の学びをよりよくするにはどうすればよいか」という現場の話までをつなげて「アクティブに」ディスカッションする機会をもち、首都大の教育がより多くの学生のプラスになるイメージを共有していけたらと思います。